

# TANKAの地位 田中拓也

二〇二〇年の東京オリンピックの開催まで約四年となった。ちなみに二〇一五年の訪日外国人旅行者数は約一九七三万人（推計）。日本への海外からの旅行者の数は増加の一途を辿っており、今後も増加傾向が予測されている。

さて、北久保まりこの二カ国語歌集『INDIGO』（SHABDA PRESS）が刊行された。同書の作品配列は基本的には「英訳短歌」「ローマ字表記短歌」「日本語短歌」の三部構成である。

・ there were / days when I told / my dream. / are you there now ? / Beitegeuse  
 ・ yunne nado wo / katashihi ari / imawa nou / rai kano shiranu / Beitegeuse yo  
 ・ 夢などを語りし日あり今はもう無いかも知れぬベテルギウスよ  
 思い出を抒情的に詠んだ作品。ベテルギウスはオリオン座のα星。地球からの距離は約六四二光年。大きな時間軸の中で自分の存在の小ささと生への愛おしさを詠んだいい歌だと思ふ。また、「英訳短歌」を通して作品を鑑賞する人にとっても伝わりやすいテーマの一首と思ふ。著者の二カ国語歌集は本歌集で三冊目。これまでにも自作短歌の朗読パフォーマンスを世界各地で続けている著者にとって、短歌を英語で発表することはごく自然なスタイルなのであろう。同歌集の序文の中でドナルド・キーンは次のように述べている。

日本人は千年以上も前から短歌を詠んできて、その間他の詩歌が新しくできて短歌はいつも特別な地位にあった。時代が

明治になると、日本の詩人の大部分が西洋の詩歌の影響を受け、三十一文字しかない短歌は、瞬間的な感覚の記録以上に表現できない、と考えられるようになった。しかし、反逆者として有名だった石川啄木は、短歌を軽視した詩人たちに次のように、短歌の持つ独特の価値を伝えた。「一生に二度とは帰って来ない命の一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。」そして、啄木は幾分か皮肉に、「歌という詩形を持つているということは、我々日本人の少ししか持たない幸福の一つだよ。」と結論している。

やや長い引用となったが興味深い指摘と思う。二〇一四年に開催された「心の花」全国大会の大会テーマは「国際化と短歌」であった。大会終了後、谷岡重紀は『心の花』（二〇一四年十二月号）に執筆した「言葉の位相」の中で、次のように述べている。

外国語短歌は可能か。その問いにも二つの意味がある。一つは外国語への短歌の翻訳と紹介であり、もう一つは外国語による短歌実作である。翻訳・紹介は、これもなかなか大変だろうが、貴い試みだと思ふ。一方短歌を外国語（例えば英語）で創作するとなると、よりハードルは高い。そこには短歌自体の本質に関わる問題がある。

谷岡は短歌の本質に関わる問題として「音数律」を挙げている。そして、その問題を深く考察していくためには短歌が様々な言語に翻訳されることが必要であろう。日本歌人クラブの「タンカ・ジャーナル」での継続的な取り組み、日・仏・英語の三カ国語の『近現代短歌アンソロジー』（仏語短歌出版）の発刊など徐々に気運が高まってきている。二〇二〇年はTANKAを世界に発信する好機と思うが、どうであろうか。